

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

1

Vol.45 No.1 JANUARY

2022

遊びの力



連載

もっと知ろう！障害がある子どもと家族のくらしの支え方
重症心身障害児の家庭における急変対応

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第9回 忘れられない苦い思い出

わが子は、滑り台の列を横入りされたとき、怒りと意地悪の入り混じった表情を一瞬見せた。私はぞつとしながらも、少し感心した。去年なら、この程度では済まず、相手を押し出していたかもしれないからだ。

子どもは無邪気で、誰とでも仲良くしてほしい、と大人は思う。しかし私は、子どもの見せる裏の顔が、結構重要だと思っている。遊び時間や放課後の、異年齢を含んでの、自由で自治的な活動が、そして時には羽目を外す行動が、人間関係において越えてはいけない一線を教えてくれる。表の顔で、良い子として伸び伸びと育つだけでは、人と渡り合えない。とはいえ、自分の子どもにそういうことを体験させたいかといえば、私も含め、躊躇する親が普通だと思う。

子どもと家族は、荷物と一緒に生活を背負って病院に入院してくる。子どもは、病院の中で生きている。つまり、その時間の人格発達は無視できない。そう強く思わせた出来事がもうひとつあった。

小児がん治療で入院中の子どもたちは、ベッド上で、ポータブルゲームに没頭していた。しかも、それは通信ゲームで大部屋の子どもたちが全員参加しているようであった。あるとき、検査から戻ってきた子どものゲームソフトがなくなっていた。そのソフトは、クリスマス専売の特別ケースに入っていた。母親がケースを開けて、筆者に空であることをみせ、「ちょっとひ

どくないですか」と憤った。誰かに盗られたと思っていた。

本人たちも身の回りを探したが、どこにも見当たらなかった。母親は同室の子どもたちにも呼びかけ、探したが見つからなかった。ところが、1週間後、再度、ケースを開けてみるとソフトが戻っていたのである。母親は驚きながらも「戻ってきたのは良かったけれど、ちゃんと謝ってほしい」と筆者にこぼした。そして、「ただでさえ、どれくらい生きられるのかわからないのだから、こんな目に遭わせたくない」と強めに言った。

同室の誰かは、物欲しさにソフトを盗ったかもしれない、さらにそれを言い出せず、知らん顔をしながら、母親からの依頼で探し物に協力さえしていたのかもしれない。その後ろめたく、名乗り出て謝ることもできない自分の狡猾さに、その子は苦々しい気持ちを体験したのかもしれない。ソフトをなくした子は、悲しかったかもしれないし、同室の子を疑ったかもしれない。今となっては、どの子も生きていないので、どうだったのかはわからない。

良いことだけを体験してほしい、という母親の気持ちも痛いくらいにわかる。しかし、私は子どもたちの間に起きた、何か後ろ暗い出来事もまた、生きているうえでは大事だったように思えて、今でも忘れられない。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。小児がんの子どもと家族を支えるエゴキクラブを主宰。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。